様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３２６３０
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７２００８３

研究課題名（和文）手稿譜として伝承された１８世紀の舞踏譜の資料研究

研究課題名（英文）Source study of 18th-century manuscripts of choreographies

研究代表者
赤塚　健太郎（AKATSUKA, Kentaro）

成城大学・文芸学部・専任講師

研究者番号：１０５２８８２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　800,000円、（間接経費）　240,000円

研究成果の概要（和文）：　1700 年に公にされたフイエ式舞踏記譜法を用いて振付を記した舞踏譜が多数現存する。本研究は、それらの振付の内、手稿資料のみが伝わっているものについて資料研究の方法を検討することを目的とし、主にフランス国立図書館所蔵の資料を調査した。
　調査の結果、同一の振付が複数の資料によって現存している事例に着目し、振付内容や併記される伴奏舞曲の異同を確認することで、資料の伝承過程や振付の変遷に関する情報が得られることが判明した。また、実際にこの方法に従ってクーラントの振付や伴奏舞曲に関する調査を行い、様式の変遷過程を明らかにした。また、舞踏譜の作成が記憶に強く依存して行われる可能性についての仮説を得た。

研究成果の概要（英文）：Many choreographic sources written in the Feuillet notation system remain existent today. This study focused on sources that are available only in the form of manuscripts and attempted to develop a method of source study for them. The primary items studied were manuscripts preserved in the National Library of France.
The research revealed that it is possible to make meaningful comparisons between sources that contain the same choreography and accompanying melodies. These comparisons yield information on the history of the source tradition and stylistic changes in dance. For example, the method developed here was applied to sources of French courantes, revealing the process of stylistic change. In addition, the comparative study of manuscript sources provides evidence for the possibility that some sources were written from memory.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：舞踏史　バロック音楽　舞曲　西洋音楽史

１．研究開始当初の背景

舞踏の歴史を振り返ってみても、過去の舞踏を再現可能な形で具体的に伝えてくれる資料は乏しい。そうした中で、例外的に過去の舞踏の振付を克明に伝えてくれるのが、18 世紀にヨーロッパで用いられていた舞踏譜である。1700 年に舞踏家Ｒ．＝Ａ．フイエによる著作『コレグラフィ Chorégraphie』が公刊されると、以後、同書において提示された舞踏記譜法に従ってフランスでは多数の舞踏譜が作成されるようになった。さらにフランス式舞踏が当時のヨーロッパを席巻していたことと相俟って、この記譜法はイギリスやドイツなど他国でも広く採用された。この舞踏記譜法は主として 18 世紀前半に用いられ、その結果成立した舞踏譜は 300 種類以上が現存しており、今日ではこれらの舞踏譜の解読が舞踏史研究において重視されている。さらに、音楽史研究においても、舞曲の演奏や研究のための前提知識として舞踏の理解が求められており、舞踏譜の研究が重視されるようになってきている。

しかしながら、これらの舞踏譜に対する資料研究は遅れている。従来の舞踏譜の研究は、過去の舞踏を復元したいという舞踏史研究的興味によって惹起され、さらに当時の舞曲の演奏解釈において舞踏を参考にしようとする音楽史研究的興味によっても促進されてきた。いずれにせよ歴史的舞踏の復元とその実践が重要視されてきたのであり、資料に関する学問的な調査や評価は等閑にされてきたのである。よって従来の舞踏復元や、そこで得られた理解に基づく様々な音楽史研究上の知見は、根本において資料の妥当性の確証を欠いていることとなりかねない。

特に事態が深刻なのは、手書きの舞踏譜（以下、手稿舞踏譜と呼ぶ）のみによって伝えられている振付である。18 世紀においては舞踏譜の出版が盛んに行われたが、これらの出版された舞踏譜（以下、出版舞踏譜と呼ぶ）については、概ね振付者や出版時期が明らかとなっている。一方、出版舞踏譜によってではなく、手稿舞踏譜のみによって伝承されている舞踏譜も少なくはない。これらの資料については、それが何年頃に成立し、誰によって振り付けられたか、さらに舞踏譜に付されている伴奏舞曲の作曲者が誰であるかといった基本的な情報が欠けている場合が多い。記述内容についても、部分的に書き損じが混入している恐れがあるだろう。そうした資料に関わる基本的な研究を欠いたまま、舞踏復元とその実践だけが先走っているのが現状である。

２．研究の目的

「１．研究の背景」で述べた状況を鑑み、18 世紀の舞踏譜に対する資料研究の方法を確立し、さらにその研究方法に従って実際の舞踏譜の検討を行うことが本研究の目的であった。資料研究の方法については、音楽学研究における楽譜資料の研究手法を大いに参考としつつ、18 世紀の舞踏譜の形態に相応しい方法の確立を試みた。

その際、舞踏譜に書き込まれた振付の記述内容にとどまらず、舞踏譜の多くにおいて併記されている伴奏舞曲の内容も研究の重要な手がかりとして重視した。舞踏の振付と伴奏舞曲の両面から資料の成立過程や伝承経緯についての推測を行う方法を確立することを、本研究の第一の目的とした。

また、同一の振付について、内容の異なる複数の手稿舞踏譜が残されている場合、どの資料が最も信憑性が高いかを推定する作業も必要となろう。そうした資料評価が第二の目的とされた。一方、振付者や伴奏舞曲の作曲者の推定については、これらの手法で新知見が得られるとは期待されず、今回の計画の目的からは除外された。

こうして工夫された資料研究の方法は、実際の資料に対して用いることでその有効性が確認されねばならない。しかし各地に散在する全舞踏譜に対して、研究、調査を行うのは非現実的である。よって本研究では、フランス国立図書館及びそこに付属する諸図書館に所蔵されている大規模な手稿舞踏譜集を研究対象として、具体的な資料研究の実践を行うことを第三の目的とした。

３．研究の方法

本研究では、まずフランス国立図書館及びそこに付属するオペラ座図書館から、対象となる資料の複写を取り寄せた。さらに、複写を通じて得られた情報の妥当性を確認し、また研究過程で生じた疑問点を解消するために、現地に赴いて直接に資料を調査している。

そうした調査の、より具体的で詳細な方法については、以下（１）と（２）の２項に分けて述べる。この２項は、それぞれ「５．主な発表論文等」の〔雑誌論文〕の項に記載した論文①および論文②の研究方法に対応している。

（１）クーラントの舞踏譜《ラ・ボカンヌ》に対する資料研究

取り寄せた手稿舞踏譜を調査していく中で、個別の資料自体を眺めていても資料の成立や伝承の過程に関する推測の手がかりとなる情報があまり得られないことと、同一振付を記した資料が複数伝わっている事例において、資料間に見られる内容の異同が多数確認され、そうした異同を手掛かりに資料に関する研究を進めることが有望であることが判明した。

そこで、当面の対象をクーラントの舞踏譜《ラ・ボカンヌ》に限定し、詳細な調査を行った。なお、クーラントは当時の舞踏教授の場において最も重要視されていた舞踏種の一つであり、なかでも《ラ・ボカンヌ》は最大規模の振付であることから、対象に選定されている。またこの振付はフランス国立図書

館において Ms. fr. 14884 という番号で所蔵されている手稿舞踏譜集と、オペラ座図書館において Rés. 934 という番号で所蔵されている手稿舞踏譜集にそれぞれ収録されているが、この２つの手稿舞踏譜集は現存する手書きの舞踏譜集の中でも群を抜いて規模の大きいものであり、両資料に共通して現れる《ラ・ボカンヌ》に着眼することが、その後の両舞踏譜集の研究に大きく益するとの期待が持てることも、研究対象に選んだ理由である。

舞踏譜《ラ・ボカンヌ》の研究に際しては、この舞踏譜に併記された伴奏舞曲のみを伝える楽譜資料をさらに３点対象に加えた。具体的には、M. メルセンヌの著した『音楽汎論 Harmonie universelle』(1636 年刊)、A. D. フィリドールの作成した舞曲集《楽しい合奏曲選集　第２巻 Recueil de Plusieurs belles pieces de Simphonie Second tôme》(1695 年成立)、そしてA. ポワンテルが出版した舞曲集《イギリス、オランダ、フランスの舞曲集 Airs de danses Angloises, Hollandoises, et Françoises》(1700 年刊)に記載された《ラ・ボカンヌ》の伴奏舞曲である。

以上の５資料を対象として振付と伴奏舞曲の異同を調査し、その結果から《ラ・ボカンヌ》の伝承とクーラントという舞踏のリズム面における変遷を考察した。

（２）バロック期の二大手稿舞踏譜集の資料研究

舞踏譜《ラ・ボカンヌ》の資料比較を通じて、舞踏譜資料の研究方法として比較考察が有効であることが明らかとなった。続いて、その方法をさらに広い範囲に適用するべく、舞踏譜《ラ・ボカンヌ》を含んでいた２つの手稿舞踏譜集であるフランス国立図書館の Ms. fr. 14884 と、オペラ座図書館の Rés. 934 について、舞踏譜集全体の資料比較を行った。

上述のように、これら両資料は規模という点で群を抜いて大きいものであり、研究対象として優先的に扱われるべきものである。また、両資料は 12 の頻出振付を全て含むという重要な特徴を持つ。ここでいう頻出振付とは、主要資料の他に 5 つ以上の二次資料によって伝えられている振付のことであり、これまでに 12 の振付が確認されている。複数の資料によって伝承されているという点から、これら 12 の振付は、18 世紀において広く踊られた重要なものであったことが推測される。

本研究では、この 12 の振付を糸口として、舞踏の振付と伴奏舞曲の両面から２つの手稿舞踏譜集の比較研究を行った。

４．研究成果

研究成果についても、「３．研究の方法」と同様に、（１）と（２）の２項に分けて述べる。この２項は、それぞれ「５．主な発表論文等」の〔雑誌論文〕の項に記載した論文①および論文②の研究成果に対応している。

（１）クーラントの舞踏譜《ラ・ボカンヌ》に対する資料研究

舞踏譜《ラ・ボカンヌ》を伝える２つの手稿舞踏譜と、伴奏舞曲のみを伝える３つの資料について比較を行った結果を、以下の３点に分けてまとめる。

①振付の比較

２つの舞踏譜間で、細かな動作を示す記号を中心に多数の違いが発見された。しかし資料自体の成立事情について不明な点が多く、いずれの信憑性が高いかも判断が難しいため、どちらの資料の情報を信頼するべきか、あるいは両者をともに信頼するべきか断定できない場合が多かった。そうした中で、男女間の動作の対称性やステップの反復性を手がかりに、一定の推測を行うことは可能であった。その結果として、両資料はどちらも複数の誤記を含んでおり、内容の面からも信頼性に大きな差を付けることができないということが明らかになった。

②伴奏舞曲の比較

２つの舞踏譜資料に併記された伴奏舞曲についても比較を行ったが、やはり両資料で誤りが散見された。そうした中、冒頭小節で両者に共通する明らかな誤りが見出された。よって、両資料の筆写元を遡ると、この誤りを含んだ同一の資料にたどり着く可能性が高いことが明らかになった。

さらに伴奏舞曲のみを伝える３つの資料を含めて、５つの資料を対象に旋律の比較を行った。その結果、メルセンヌの資料とポワンテルの資料の間に一定の類似性が、さらに２つの舞踏譜に付属する舞曲とフィリドールの資料の間には非常に強い類似性が見られた。一方、ポワンテルの資料には舞踏譜に引き継がれていない特徴的な箇所が見出された。よって 17 世紀のいずれかの時点で、この伴奏舞曲の変遷は、ポワンテルの資料が示す経路と、舞踏譜やフィリドールの資料が示す経路の２つに分岐したとの推測が得られた。

③舞踏の定型ステップと伴奏舞曲の対応

諸資料の比較から、伴奏舞曲《ラ・ボカンヌ》が、各小節の第３拍に付点四分音符と八分音符を組み合わせたリズム型を多く示すように変化していったことが明らかとなった。このリズム型は、18 世紀の舞踏資料に見られるクーラントの定型的なパであるパ・ド・クーラントを促進する重要な要素であり、ここからパ・ド・クーラントが普及していく過程を読み取ることが可能である。

（２）バロック期の二大手稿舞踏譜集の資料研究

フランス国立図書館の Ms. fr. 14884 と、オペラ座図書館の Rés. 934 に共通して現れる 12 の頻出振付の比較からは、以下の３点が結論として得られた。

①両資料の信頼性について
両者がともに誤りを含んでおり、信頼性の点では優劣を付けがたいものであることが明らかになった。

②資料間の異同の発生状況について
舞踏譜における振付や伴奏舞曲の記述には資料間の相違が発生しやすい要素とそうでない要素があること、そして同一振付を含んだ初出出版舞踏譜の出版が早いものほど多くの相違が確認されることが明らかになった。

③舞踏譜の成立に関する仮説
以上の考察結果、特に②に述べたような異同の発生状況から、２つの手稿舞踏譜集の筆写に際し、典拠となる資料を用いることなく記憶から筆写を行っていた可能性も浮上した。これは、純然たる即興の場合を除いては基本的に楽譜という記録媒体を用いる音楽と、実践の場では通常舞踏譜のような記録媒体を手にしない舞踏との違いを明らかにしたことになる。従来行われてきた舞踏譜に関する資料研究は、紙から紙への筆写という音楽における楽譜の伝承のような事例を念頭においていたが、それでは不十分である可能性があることも本研究で明らかになった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 赤塚　健太郎、バロック期の二大手稿舞踏譜集の資料研究――12 の頻出振付の比較を中心に――、成城文藝、査読有、226 号、2014、pp. 66-84、http://www.seijo.ac.jp/pdf/falit/226/226-4.pdf

② 赤塚　健太郎、舞踏譜《ラ・ボカンヌ》と、その伴奏舞曲を伝える諸資料の比較研究、武蔵野音楽大学研究紀要, 査読有、43 号、2011 年、pp. 23-40。

６．研究組織
(1)研究代表者

赤塚　健太郎（AKATSUKA, Kentaro）
成城大学文芸学部専任講師
研究者番号：１０５２８８２１